

やましん歌壇掲載歌

毎月一度の投稿を始めて五年十ヶ月が経過しその間に一〇三首の選歌掲載（月平均

掲載率：約一〇首）となっております。

それらの中で写真短歌は四十一作品で約40%を占めております。

◎令和二年二月三日

佐藤幹夫選 ひたすらに我癒されし「白い森」おぐにの秋の懐深し（＊）

井上管子選 黄昏るる湖面に溶け込む秋の山墨絵にも似てこころ風ぐ時（＊）

◎令和元年十二月十六日

佐藤幹夫選 山もみじ夕影受けて色まさり映る湖面は令わせ鏡に（＊）

大滝 保選 ハイカーの標しるべならんと咲き並び山路を誘うりんどうの群れ（＊）

◎令和元年十一月十八日

佐藤幹夫選 寺の秋茶会の前の挨拶は仏縁地縁の訛り溢れて（＊）

井上管子選 風に乗り笛の音届く散歩道辿れば吹き手東屋に居り（＊）

◎令和元年十月二十一日

佐藤幹夫選 足元に蚊遣り焚きつつ登り室の火入れ待ち居る室主ひとり（＊）

大滝 保選 風鈴に虫の音加わりコンチエルト主役の代わりはや秋の風

◎令和元年九月二十三日

井上管子選 十五歳父の遺骨を抱き帰る双葉町の墓に夏の日落ちき

◎令和元年八月二十六日

佐藤幹夫選 「寄り添う」の言葉の重さ比べ読む沖繩語る今朝の新聞

大滝 保選 山あいのオープンガーデン風そよぐ鮮あざやぐ初夏を妻と頷わかてり（＊）

◎令和元年七月二十九日

阿部京子選 郭公の声のリレーに誘われ歩む山道こみどり萌黄

井上管子選 銀毫草朽葉押し分け株立てり過客を癒す山の辺の道（＊）

◎令和元年六月十一日

阿部京子選 石蹴りの筋跡避けて草むしる桜の蕾はころぶ公園

歌壇掲載人札

(* : 「写真短歌」 の作品)

選評 自身の、幼いころの思い出が脳裏を過って生まれた心配りであろう。

ごはん時に遊びを止めて帰った記憶。明日の続きの爲に「避けて」が効いた。

大滝 保選 山里の田舎芝居の幕の下り夜の帳とばりに桜舞い散る (*)

◎令和元年五月

井上管子選 改元が紙面に躍り朝の雪解けて路面は煙めく鏡

◎平成三十一年四月

阿部京子選 めぐり来る建国記念日新聞に是非論載りしも遙かとなりぬ

選評 皇国史観で教育を受け、戦後全てを否定されて戸惑った。四大節の一つ

「紀元節」を「建国記念日」と変えることに世論沸騰した頃への感慨を詠んだ。

大滝 保選 核を持つ国が他国へ求めたる放棄の論理に不条理覚ゆ

◎平成三十一年三月

井上管子選 手織り機に横糸通す杼ひの如く人を繋ぎてまちづくりなる

◎平成三十一年二月

大滝 保選 新聞を配りし人の自転車の轍わだち一筋初雪の朝

◎平成三十一年一月

阿部京子選 参道の日の斑を踏みて黄落に誘われゆく黄昏の道

井上管子選 求人誌派遣やパートが幅利かせ先の読めない社会となりぬ

◎平成三十年十二月

阿部京子選 山頂の標識に残る忘れ物サングラスに映る秋の白雲 (*)

大滝 保選 千余段杖を頼りに登り来し人に応うる夕山紅葉 (*)

◎平成三十年十一月

阿部京子選 谷向こうに西日を受けて照るもみじ見つつ語らう老いの背ふたつ (*)

◎平成三十年十月

阿部京子選 疾歩するハイカー独り馬の背の遙か彼方にはや秋の雲 (*)

井上管子選 戦いの痕跡残る土塁脇鳥居の陰の群れ曼珠沙華 (*)

大滝 保選 高原の広場の隅に読書する人の傍らをアスリートら過ぐ (*)

やまの歌壇掲載歌

(* : 「写真短歌」 の作品)

◎平成三十年八月

阿部京子選 姫沙羅の花弁に残るひと雫真夏の空の青映しおり

井上管子選 日捲りの暦のごとく政策の消えては現れ言葉が躍る

大滝 保選 高原の藪を掻き分け進む先叢れ咲く菖蒲あやめに擦り傷忘る (*)

◎平成三十年六月

阿部京子選 春の暮の花散り果てし山里の黄昏時は緑のとばり (*)

井上管子選 お達磨の匂いやかなる江戸彼岸いにしえ人の心を映し (*)

大滝 保選 地方にもインバウンドの波至り行楽の地に多言語溢る (*)

◎平成三十年五月

阿部京子選 道の辺の祠の裏は春さなか日影うらうらカタクリ群れて (*)

◎平成三十年四月

阿部京子選 参道の連なる日の斑に落ち椿御堂へ誘ふ標しるべとなりぬ

井上管子選 御堂へと続く参道雪積みて鳥居を前に佇み祈る (*)

大滝 保選 一輪の流れ着きたる雪椿堪えぬきし冬を緋に秘めており (*)

◎平成三十年二月

阿部京子選 霧の朝佇む岸辺凍みこごり鳥の一声静けさを裂く

井上管子選 中東で散りし友らの七回忌雪の凍む朝この地で祈る

大滝 保選 恒例の暮れの作業の近づけり竹馬の友の名リストより消せず

◎平成三十年一月

阿部京子選 一病とつき合いてはや半世紀遊行の門への錫杖とせむ

◎平成二十九年十二月

阿部京子選 散りもみじ魅らせて水の面は新たな舞台漣もなし (*)

井上管子選 街中の空家の庭先山とあるくらしの品の朽ちゆくが見ゆ

◎平成二十九年十一月

阿部京子選 猫じやらし路肩に揺るる田舎道踏む松落葉足に優しき

大滝 保選 幸せのきざしか実如の二重虹雨の上がりし刈田に架かる (*)

やまの歌壇掲載歌

(* : 「写真短歌」 の作品)

◎平成二十九年十月

阿部京子選 荒沼に墨絵の時間流れきて湖の面は鏡の舞台(*)

井上管子選 リリリリ白露の宵の暗がりの青色に忘ふる仲間のリリリ

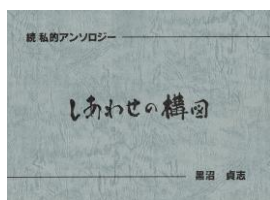
◎平成二十九年九月

阿部京子選 帰国せしパリの友との語らいの話題いまだに原発震災

井上管子選 草花を巡りて出で逢ふ酔芙蓉口遊みけり「風の盆恋歌」(*)

大滝 保選 久々に友と語らふシヨットバーカクテルグラスに汗の伝ふる

以下(平成26年3月
~平成29年7月)の
52首は平成29年
11月発行の冊子「続
私的アンソロジー-“しあわせ
の構図”」に掲載して
おります。



◎平成二十九年七月

大滝 保選 断捨離の成果の箱を古書店へこころ残りの帰路はたそがれ

選評 断捨離とばかりに箱一杯の古本を出したが、後悔の念も消えない。結句の

「たそがれ」は「人生の黄昏れ」の心象でもあろう。気持ちの分かる歌。

井上管子選 松蟬に蓮華つづしが色を添へ谷地沼にはや夏のよそはひ(*)

◎平成二十九年五月

井上管子選 待ち切れぬ心たずさえ春探しぬかるみ避け行く城址の小路

大滝 保選 大根のおろしのごとき雪積る卒業式の朝の通路に

◎平成二十九年四月

阿部京子選 春の日の射し込む御堂に祈りおり耳を澄ませば雪解の瀬音

大滝 保選 目覚めれば鳥の囀り耳に入る障子明るく春をうつせり

◎平成二十九年三月

井上管子選 いつからか知己の名探す「おくやみ欄」思い湧きいづわが名の載る日

選評 歌に詠んだことはないが同じ思いをしたことがある。という人は多いはず。

知己の名探すから、わが名の載る日までの軽やかな調べに、重い内容が救わ

やまの歌壇掲載歌

(* : 「写真短歌」の作品)

れる。

阿部京子選 行き暮れて辿りつきたり道の辺のコンビニにはや夕光ゆうかけは射す

◎平成二十九年二月

大滝 保選 新学期子らの弁当始まりぬ朝の隣家にたまご溶く音

◎平成二十九年一月

阿部京子選 生活の脚の手立てを置き去りに免許返上ひとり歩きす

井上管子選 寒風を割きて上れる噴水は暮と広がり山裾隠す(*)

◎平成二十八年十二月

阿部京子選 小走りに園児らがゆく黄葉路あいさつ響く霜月のあさ(*)

◎平成二十八年十一月

井上管子選 薄暗き朝の目覚めに鳩鳴けりクウクウクク秋はきており

大滝 保選 涼求め車で走るすすき道フロントかすめあきつ群れ飛ぶ

◎平成二十八年十月

阿部京子選 新涼は行きつ戻りつ庭先の虫の世界へ秋の往還

◎平成二十八年九月

井上管子選 早苗饗のテレビ映像眼に留り忽と戻りぬ少年の頃に

大滝 保選 あさまだき目覚めの一杯の白湯さゆ旨し備忘録しる記す手も捗りぬ

◎平成二十八年七月

井上管子選 管理下と言われて久しきフクシマの海は黙してメデイアが語る

大滝 保選 雪残る霊峰を背に芝ざくら覆える堤は王朝絵巻(*)

◎平成二十八年六月

阿部京子選 公園に軋んで揺れるブランコに遊んだ子らの気配が残る(*)

◎平成二十八年五月

井上管子選 今の世に広まる「絆」氣に留まり「枷」の意味もつ「ほだし」の読みしる(*)

大滝 保選 いつよりか「世話にはならぬ」が揺らぎをり遠くに暮らす娘と語れば

やまの歌壇掲載歌

(* : 「写真短歌」 の作品)

◎平成二十八年四月

阿部京子選 淡雪がうすく積もれる朝の道足跡ひと筋わが先にあり

井上管子選 雪の道手を取り歩む老いふたり交はす笑みにもにじむ年輪

◎平成二十八年三月

阿部京子選 雪原を一輛列車進み行く女子高生のにぎわい乗せて

選評 過疎地をつなぐローカル線の通勤通学時にのみ賑わう一輛の情景。簡潔に

まとめられた。評も簡潔に終わる。

井上管子選 屋根を打つ微かなる音に心解く雨水間近い目覚めの朝に

大滝 保選 たまさかの妻の不在に慣れぬ家事先行き危ぶむ思い湧きいず

◎平成二十八年二月

大滝 保選 起業よりはや十五年廃業の意思を固めぬ勤労感謝日

◎平成二十七年十一月

井上管子選 いつからかシルバーウィークと呼ばれおり老いを敬う想い遠のく

◎平成二十七年十一月

阿部京子選 遠き山近き紅葉を水面に浮かべて池は秋の万華鏡(*)

選評 遠景、近景すべてを映す水面の華やかさを「万華鏡」と捉えた。

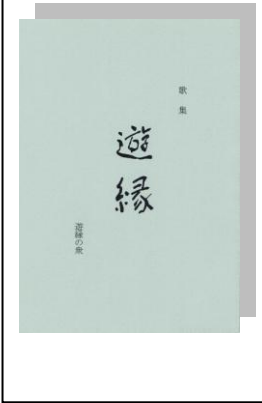
心の動きに雑念がなく直線的な描写が心地よい。

◎平成二十七年九月

井上管子選 かなかなの途切るる声にかなかなと遠くて忘えるかなかなの声

大滝 保選 フェンス越しのプールで拳がる歓声に幼き日々の想い出湧き来

以下の20首は平成27年11月発行の遊縁の衆の歌集「遊縁」に掲載しております。



◎平成二十七年七月

井上管子選 祭りへと歩みを揃う親子連れすがしき初夏の山間の道(*)

やまの歌壇掲載歌

(* : 「写真短歌」の作品)

◎平成二十七年六月

阿部京子選 戦争を知らない世代が世の中を動かす社会いつか来た道

◎平成二十七年五月

井上管子選 懐かしきむかしのテンポよみがえり委ねて歩む都心の雑踏

◎平成二十七年四月

阿部京子選 ウェブサイト食のレシピが溢れおり貧しき時代遙かとなりて

◎平成二十七年三月

井上管子選 十年の歩みを話す機会得て浮かび上がりぬマイライフワーク

高橋光義選 雪いろの町を歩めば甦る遙か昔の通学の路

◎平成二十七年一月

井上管子選 枯れ野原春の彩まぼろしに黄昏早く秋が身に染む(*)

高橋光義選 高齢と言えども今はタブレット連れ合い待たせて画像に残す(*)

◎平成二十六年十一月

井上管子選 新幹線車窓の先の錦秋に思わず止まる弁当の著

◎平成二十六年七月

井上管子選 会合を終えたる昼を軒先の燕話題に再び賑わう

高橋光義選 木漏日がいざなう小道その先の休みどころにひとの気配なし(*)

阿部京子選 主去りし家の庭先草繁し人の気配の露もとどめず

◎平成二十六年六月

阿部京子選 春蘭にまた逢えたねと声かけぬ春まだ浅き山路の片方(*)

高橋光義選 春寒し蝶もしばしの羽根休み山の小径の陽だまりの中(*)

◎平成二十六年五月

井上管子選 春の彼岸に残雪踏みて墓掃除想い往き交う彼岸と此岸

高橋光義選 地鎮祭願い通して雪の止み友の位居に祝詞流るる

◎平成二十六年四月

やましん歌壇掲載歌

(* : 「写真短歌」 の作品)

阿部京子選 誰そ彼が黄昏となる万葉の世界にひたりひとを想えり

高橋光義選 精検を待つ間の長さ息苦し交わす目線に共感覚ゆ

◎平成二十六年三月

阿部京子選 風邪に臥し久々に見る夢の中母の十八番の懐かしき粥

井上管子選 冬の列車は吹雪く山あい割きて行く向う先にはフクシマの街(*)